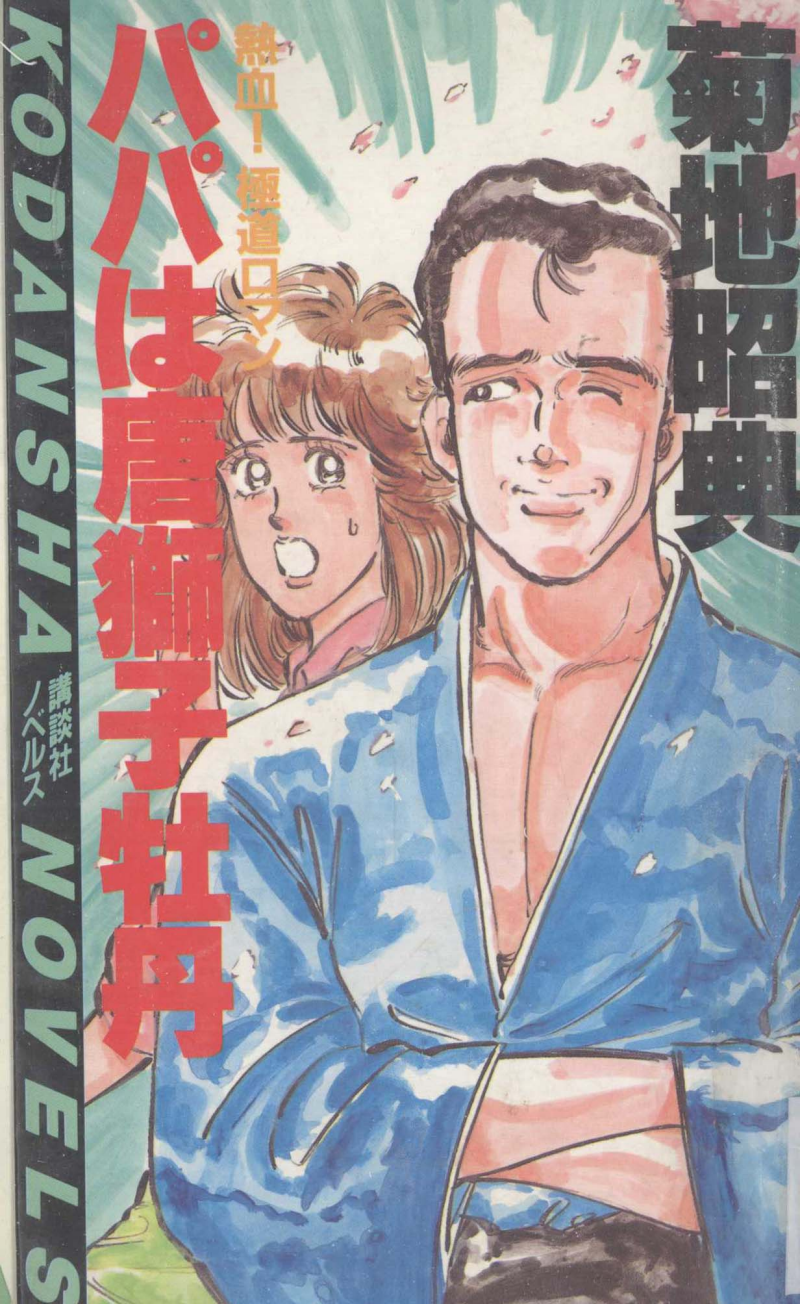
菊地昭典
熱血！極道ロマン
パパは唐獅子牡丹
講談社ノベルス
KODANSHA NOVELS

パパは唐獅子牡丹

昭和六一年一月一〇日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六四〇円

著者—菊地昭典
©1986 AKINORI KIKUCHI Printed in Japan
発行者—野間惟道

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二—二　電話東京(〇三)—九四五—一一一一(大代表)

印刷所—株式会社廣済堂　製本所—大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

SBN4-06-181228-9 (0) (文二)

菊地昭典
熱血！極道ロマン
パパは唐獅子牡丹
講談社ノベルス
KODANSHA NOVELS

おもての勤めは、おもちゃの店の支店長・春日政次郎。そして、妻子も知らない裏の稼業は、筋目正しいヤクザの若頭補佐〝人斬り政〟。この政の組に新興勢力の暴力団が圧倒的な力と頭脳で戦いを挑んできた。死亡率30パーセントという恐怖のスポーツで決着をつけようというのだ。その名も恐るべし、アメリカン・ドッジボール！

菊地昭典（きくち・あきのり）

昭和22年仙台市生まれ。中央大卒。映画、テレビドラマ、ドキュメンタリーの構成と脚本を手がける売れっ子で初の小説。

ISBN4-06-181228-9
C0293 ¥640E (0)

定価640円

# パパは唐獅子牡丹

昭典

DANSHA 講談社ノベルス NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝楠みちはる
本文イラストレーション＝楠みちはる

目次

1 人斬り政、参上――7
2 サラリーマン春日政次郎大変身――21
3 逆変身不可能の大ピンチ――50
4 ああ涙の大運動会――70
5 恐怖のアメリカン・ドッジボール――86
6 さらば愛しのジミー――123
7 風雲！ 神竜稲荷公園市民連合――150
8 二代目委員長殴り込み――172
9 雨に泣く唐獅子――201

我が愛する家族に捧ぐ

喧嘩の前に——人斬り政

机の前で——筆者

# 1　人斬り政、参上

神竜稲荷公園通りの両側には、数百本の満開の桜。折しも吹いて来たつむじ風に煽られて、花びらが、一斉に散り舞い踊った。四方を見通すことができず、あたかも桜模様の緞帳に囲まれているようである。

その桜吹雪の緞帳を、スパッと割って一人の男が現われた。

髪は、オールバック、一瞬にしてそれ者とわかるすさまじい目つき、左頬には耳から口元へと五センチもの刀傷。ねずみ色の大島紬の胸元には、真白な晒。大仰な外股歩きの足には、もちろん、雪駄。〝渡世人〟という言葉を聞いて、すぐ目にうかぶその姿通りの着流しの男が、真一文字に花道をすすんで来る。

舞い散る桜を肩にうけ、男が、ぐいぐいと歩をすすめていく。その度に、一陣の風が、さらに舞い起こり、無数の花びらが渦を巻いた。

枝から降りてきたみの虫が、男の肩に触れそうになる。男が、そのみの虫をみつめると、みの虫は、あわてて糸をたぐりよせ登って行った。交尾しながら飛んでいた蝶たちが、男の顔前で、あわてて離れた。

「すまねえ、迷惑かけちまった。みの虫さん、チョウチョさん」

男は深く腰を折って、再び、相手を求めてもつれあい始めた蝶たちを見送った。

という位、その男の顔、姿には、並々ならぬ凄みがきいていた。

その男が、ふと神竜稲荷公園の方を見ると、黒スーツの男二人が、若いアベックをからかっていた。

男の回りの空気が緊張し、さらに、濃密になった。男は、その濃密な空気を切り裂くように、公園内に足を踏

みいれた。
「おい、堅気さんをからかっちゃいけねえぜ」という男のその言葉が、空気を重く響かせ、黒スーツの一人の首すじにぶちあたった。
ブルッと身を震わせた黒スーツが、「何を！」と、振り向く。
その男がひと睨みくれてやる。「ヒ、人斬り政……」と、顔をひきつらせたまま黒スーツの一人は、ズボンの前を押さえた。その両手の間から、ホンノリと湯気が昇ってきた。よほどの恐怖感に支配されているのか、顔は小刻みに痙攣し涙さえ浮べている。
「なんだ、こいつは？」交尾している蝶さえあわてて離れるこの男の恐ろしさをまだ知らないもう一人の黒スーツが、近づいて来た。
「お若いの、A・J・S・Cの者かい？」
「ああ、沼津から、単身赴任したばかりよ」
A・J・S・Cとは、オール・ジャパン・ソフィスティケイテッド・カンパニーの略で、最近、進出して来た新興暴力団である。完全な株式会社組織をとっているため、構成員たちは、自分たちを、正真正銘の会社員と思っている。
「それじゃ、家族は、沼津に？」
「ああ、女房は、『父ちゃんは、会社に嫁いだようなもの』と、嘆いているぜ！」
「そうか、女房がいるのか……。やっかいだな」
「いて悪いのか！」
「子供は？」
「男のガキが一人！」と言うや、単身赴任したばかりのその社員は、突び出しナイフを構えた。
女房、子供を悲しませたくない。いつも、女房、子供は、屈託のない笑顔でいてもらいたいもの。着流しの男は、握りしめた鉄拳をゆるめ、別な作戦に出ることにした。
相手との距離を縮め、鼻がこすれる位の所で、思いっ

きり睨んでやる。そのとたん、単身赴任の社員は、ふにゃりとくずれ失神してしまった。
「学生さんたち、おケガは、ありませんか？」
男が振り向くと、アベックは、とうに失神していた。
この着流しの男こそその世界では、敵味方から人斬り政、鬼政と恐れられ、堅気衆からは仏の政さんと、頼りにされている最後の侠客新竜組若頭補佐春日の政である。
この政が、北口商店街のはずれにある組事務所の竜マークのガラス戸を開けると、待ってましたとばかりに、竜の印半纏を着た若衆の一郎、二郎が声を掛ける。
「政兄い、お早ようございます！」
「親分と若頭が、お待ちです！」
うむと、あごで挨拶をし、よく磨かれた廊下に立つ。すかさず一郎は、雑巾で足の汚れをぬぐい、二郎は、乾いた手拭いで裾のゴミを払う。
その一郎の顔面が、いきなり蹴っとばされる。
「ブァキャロー！」竜マークのあるガラス戸が、その声のすさまじさに、三枚割れた。今週は、これで、十一枚。さすが、兄貴だ迫力があると、二郎は感動にうちふるえた。
「す、すみません」
「お湯じゃねえか」
「は、はい。今日は少し寒いので、水では……」
「任侠に、お湯はいらねえ。ふにゃけてしまう」
「すみません」
「それにな、二郎」
政のドスの効いた太い声が響く。土間を這っていたゴキブリが息をつめた。
今度は、政は二郎の頬を張った。
「す、すみません」
「この手拭いは、つかうなと言ったろ。このチャラチャラした色といい、書いてある文句といい気にくわねえ。


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

『みんなで、毎日、コンニャクを食べましょう。全日本健康食コンニャク推進協会』だと。もっと、ピシッとしたものを使え」
「わかりやした。すみませんでした」一郎と二郎の二重唱を背に、政は、肩をいからせ廊下を歩いて行った。
顔に足型の一郎と鼻血を流した二郎は、深々と腰を折り見送る。その二人の身体が、心なしかふるえている。政に、任侠の心を教えてもらった喜びと、政に接する恐怖感。そんな複雑な感動に、二人は包まれていた。
廊下を行く政に、親分のあの勘高い広島弁もどきが、障子を通して聞こえてきた。
「わしはのう、口惜しいんじゃ。池辺、出入りをかけぇー、出入りを！」
「異議なし、委員長！　と、挙手をしたいところですが、親分、時期尚早と思います」
「ええい、歯がゆいのおー」
「親分」
「おお政か、待ってたぞ。入りんしゃい」
政が組長室に入ると、床の間の『任侠道一本槍』という掛軸を背に、やっと、長火鉢からゴマ塩頭をのぞかせている着流しの老人が振り向いた。
小さな顔には、横じわが無数にあり、縦にはかなりの刀傷が走って、ちょうど碁盤の目のようになっており、そこに黒い碁石を二つ並べたような、鋭い眼があった。これぞ誰あろう、かつて関東一円きっての超過激暴力集団で、扱いにくくどの系列にも属さず組自体が鉄砲玉といえる新竜組、その五代目組長の藤本笹兵衛である。
ふちなしメガネに青白く細長い顔、淡いブルーのスーツといった商社マンタイプの紳士が、親分の前にかしこまっている。この男が、政の兄貴分である新竜組若頭池辺良一である。メガネ越しに、涼しい眼差を政におくる。
深々と挨拶をした政、池辺のななめ後ろに座った。
「政、抗争（でいり）じゃ！」
「兄貴、またなんか、A・J・S・Cの連中が……」

「ああ、この手紙を見てくれ。余市とサブからだ」
「組を抜けて、敵方に寝返ったあいつらが、今頃……」
「まあ、読んでみてくれ」
航空便には、踊り狂って疲れたようなアルファベットが書かれており、どうやらホンコンからしいが、差出人の住所はなかった。

『拝けい　春風ひとしおうららかに、身も心ものどかさを覚える頃となりました。御一同様お変わりもなくお過ごしのことと存じ、ホンコンよりはるかにお喜び申し上げます。十二年後に中国返かんが予定されているホンコンの今日このごろ。有名な海水浴場であるレパルス・ベイの海は、ます〳〵エメラルド色をましておりますし、東洋のホタルカゴと言われるビクトリア・ピークの夜景も、さらに美しさをましております』

「こ、こいつら、ホンコン旅行の自慢を……」

「次のページからでいいだろう。まあ、ひどいもんだ」
池辺の言う通り、元新竜組組員の余市とサブは、A・J・S・Cに引き抜かれたあと、悲惨な目に会っていた。

『私とサブは、社員研しゅうということで、ホンコンに来ました。ついた日だけでした、この会社に入って良かったと思ったのは。次の日、研しゅうということで有名なはんか街であるネイザン通りから何百メートルか入った裏通りのクラブに連れて行かれました。そこで、私たちに〝任侠ショー〟をやれと言うのです。ドスの殺陣回りと、ふんどしひとつでいれずみを見せながら踊るという、男ストリップを、私らにやれというのです。断わりますと、いきなり指をつめさせられました。まあ、これもサマになるということです。いやなら、一日一本つめていくというのです。これじゃ、十日たちますと、便所に行っても、紙もふけなくなります。仕方なく、二人で、その〝任侠ショー〟というものをやりました。し

かし、しだいに要求がひどくなってきまして、ステージで、サブのオカマを掘れと、支配人が言いだしやがったのです。高い金で、買ったんだから、その位の芸はあたり前だと、ぬかしやがったんです。私たちは、だまされていたんです。売られていたんです。指つめをかくごして、二人で逃げましたが、すぐ、つかまっちまって、今度は、畜生、オカマ売春をさせられました。毎日毎日二、三人、男をとらされておりました。クソをしているのかどうかその感かくもわからないくらいになりました。そこで、サブには悪いが、ひいきの客に足抜けを手伝ってもらい、今、そいつの世話をうけています。しかし、ここも同じようなもんです。この男が、好き者で、しょっちゅうせめて来ます。おかげで、はって歩いているようなしまつです。今度は、中国伝来のテン足という奴に俺の足をするそうで、小さなくつをはかせられています。何やら、あそこのしまりが良くなるそうで。この手紙、あの好き者がいない時を見つけて書き、近所の子供に頼んだわけです。この手紙、組にとどくことをいのるばかりです。私たちが、あまりにもあまかったです。極道をはるのに、保険や必要経費をほしがるなんて、こうかいしてます。今じゃ、新竜組が、なつかしいです。いろんなことが、思い出されます。

親分、はじめてお流れをいただいた時のあの酒、おいしゅうございました。

若頭、レミーマルタンのあの甘いかおり、一生忘れません。

政兄い、しゃぶ、おいしゅうございました』

そこで、親分が、碁石のような眼で政を睨みつけた。

「おい政、組の掟は、知っとんのかいな」

「ヘイ、女とヤクには、手を出さねえというのは、じゅうじゅう知っております」

「そんじゃ、そのしゃぶちゅうのは！」

「親分、私が、特にしゃぶを嫌いなのは、知っていらっしゃると思いますが」

「そうだのう。ほんじゃ読み違えたんじゃのう。どうも眼が悪くなって困ったもんじゃい」
「なあ政、それはともかく」
「なんじゃい池辺。このわしが、新竜組の組長が、自から近頃眼が悪うなってきたと、言っとるんじゃ」
「はい。お大事に。若い者に医者を呼んで来てもらいましょう」
池辺は、親分が何を欲しているのか、よくわかっていた。しかし、それは、組の財政と深く関わっていることなので、無視していた。
「栄養のあるやつをだな。例えば」
「しゃぶしゃぶでしょ、親分」池辺は、ポケットから電卓を取り出した。
政は、何故、親分が、しゃぶという言葉にこだわったのか、ようやく合点がいった。と、同時に、池辺のインテリ度に敬服した。
「親分の好きな銀座の〝ざくろ〟にしますと、デザートの抹茶シャーベットつきのフルコースでは、確か一人前一万五千円ですから……」
「もうええ、もうええ。駅前ビルのファミリーレストランのでもええ」
さらに、政は、池辺のインテリジェンスに感心した。組の財政困難を、こんなさりげない形で、表現したからである。
しかし、そんなことを言わざるをえない池辺とそれを素直に受けざるをえない親分の二人の会話が、悲しかった。かつて新竜組の勢いといったら、飛ぶ鳥が落ちるどころか、鳥が飛ぶのをあきらめる位の迫力があった。今では、飛ぶ鳥が……。そこで、政の思考は、中断された。
「まあ、池辺、話をすすめてくれい」
「わかりました」
池辺が、電卓をポケットにしまい込むと、親分の眼が、安堵に包まれた。

「なあ政、この手紙、はっきりとは書いてないが、どうやら救いを求めているね」
「そのようです」
「ということで、政、喧嘩じゃ！」
「ヘイ」
親分の只ひとつの解決策は、〝喧嘩〟。
この言葉を発するとき、いつも親分の眼は、異様に輝く。
「まあ、親分も、政も待ってくれ」
池辺が言うには、A・J・S・Cの手口は、合法的でつけいるスキがない。いま、一方的に殴り込みをかければ、責められるのはこちら、ということであった。
A・J・S・C。オール・ジャパン・ソフィスティケイテッド・カンパニーは、表向きは、広告代理店という完全な株式会社組織をとっていた。そのため、三年前、新竜組の縄張りのすぐ間近に進出した時も気にしてはいなかったのだが、独自のシステムでしだいにのして来ていつの間にか両者の勢力は、逆転していたのである。
広告代理店というだけあって、イギリスの名門イートン校を卒業したという木戸社長は、イギリス紳士然としているし、社内の組織も普通の広告代理店と同じように、営業局、制作局、媒体局、S・P局、マーケッティング局、管理局と分かれている。
今、池辺が説明しているのは、このマーケッティング局と管理局の合同プロジェクトの内容だった。〝ラジカル能力バンク〟という別会社を作り、夜の街角で、リサーチと称してマンハントを行なっているのである。チンピラ、暴走族、私大体育会系のそれらしい男たちが、主に勧誘されていた。国民保険、生命保険、傷害保険を保障し、刺青も必要経費として認め、週二休制で、超過勤務手当も出すというのである。さらに驚いたことには、ハクをつける為に指をつめたい時は、大学病院で、麻酔をかけて切断してくれるともいう。


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong